

のがある。(乙、附圖第九、二圖及び九三、一〇〇頁)

古代彫刻家が、大膽に新機軸を試みた所は、こゝまであり、嘗て非常な慣習の束縛を少しでも脱しようとはしなかつたが、人間は一法則を正面から犯さうとしないでも、隙を窺つて曲げようとする事はある。終りに、中印度の美術家が相繼いで示してゐる異つた二運動について述べなければ、印度古代派の作品研究も未だ不完全たるを免れぬと思ふ。中印度の美術家は、現はす事の出来ない世尊の此土の生涯が、兎も角、佛教傳説を悉く示すものでない事に氣附いたのであり、此の中には、一方で本生 *Jataka* があつて、正覺を得るまで、あらゆる徳本を行じて將來佛陀となるまでの無数の前生を物語り、他方で譬喩 *Avadāna* があつて、入滅後、阿育王時代に至るまでの、世尊の遺物傳播に關係した一群の傳説がある。世尊出世以前と入滅以後との二期に、あらゆる傳承的羈絆を脱した新しい領域が、彫刻家の開拓する所となり、自由によるその思ふ所に従つたのである。

斯の如くにして、バルハットの彫刻家が、題材を世尊在世中の傳説よりも、本